

もてもて通信

2021イースター号

Happy Easter!

1年を超えて続くコロナ禍であろうと、イースターはやってきます。春もやってきます。

主イエス・キリストのご復活、おめでとうございます！！

去年は、4月第2週がイースターで、その翌週から教会がクローズになりました。6月には再開したものの、聖歌を歌わない、週の感染者数によっては陪餐がないなど、新しい様式となってほぼ1年、だいぶ慣れてきました。慣れすぎてしまったためか、イースターの日に集合写真を撮るのを忘れてしまいました！

3月あたりから、徳島でもまた感染者が増えてきました。それも、今までとはケタが違ってきます。4月に入ってからは、日に20人25人と、より増えているようです。その割には、社会全体の雰囲気は「大丈夫」という方に向かたがっているように感じます。

どうぞ皆さん、安全にお過ごしください。



春先、黄砂もひどかったですね。佐古小学校の桜とテモテ教会正面の写真を撮った日も黄砂のために空が白っちゃけています。それでも、去年はあまり桜を楽しめなかったので、今年は貪欲に楽しみました。

特に眉山が美しかったです！

この1年、寒暖差がはげしかったので、秋には紅葉がとても美しく、春になって桜がところどころにあるのが、これまた美しく、今は、徐々に緑になっていくのが良い感じですよ！



2月14日 現在堅信受領者総会

昨年まで信徒総会は、礼拝後に食事を終えてから集会室で行われていました。今年は食事ができないので、礼拝後に引き続いて、一部の方はオンラインで、そしていつも礼拝に参加しているぬいぐるみくんたちとともに、総会が行われました。



2月17日 大斎始日（灰の水曜日）

静かな大斎始日でした。雪の降る中、西野みゆきさんがいらして、3人で礼拝し、額に灰の十字を記しました。

礼拝中、ヒヨドリが窓枠にとまって窓を叩いていました。雪で寒くて中に入りたかったのか？十字をつけて欲しかったのか？ナゾです。



3月のテモテ教会



集会室に、ちゃんと冷える冷蔵庫が来ました！今までの冷蔵庫は、冷蔵室にお肉を入れておくと1日でダメになる状態でした。今回も右開きの冷蔵庫でしたので、設置場所を変えて、ものが取り出しやすいようにしました。

実は、入れ替える際に大失敗しました。前の冷蔵庫も、今家にある冷蔵庫も、上から冷蔵室、冷凍室、野菜室なのですが、この冷蔵庫は、冷蔵室、野菜室、冷凍室の順番でした！間違っって入れてしまったため、冷凍品と、いくつかのお酒をダメにしまいました。ごめんなさい。

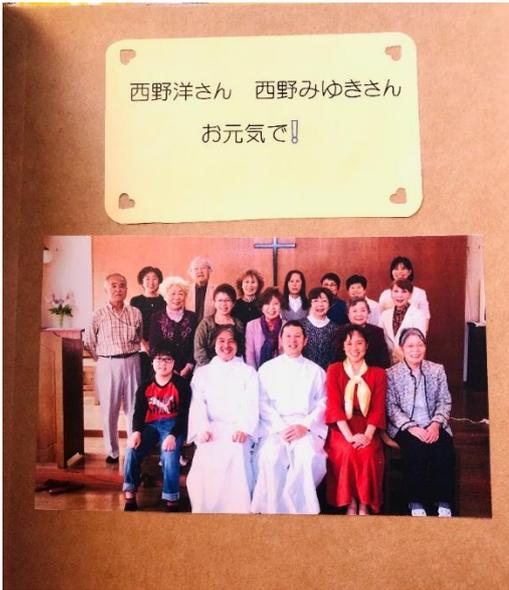


← 3月号の読み物は、牧師と牧師補そろい踏みでした。

庭先の沈丁花が、けなげに咲いて、香っていました。 →



3月21日 西野さんご夫妻Farewell



西野洋さん、西野みゆきさんご夫妻が、千葉県のご自宅に引っ越される前の最後の礼拝でした。

みゆきさんに歌っていただきたかったと思いながら、礼拝の前奏に「オンブラ・マイ・フ」を弾きました。礼拝後、皆さんに書いてもらったメッセージカードと写真で作ったファイルを贈り、「かみともにいまして（聖歌522番）」を全節弾きました。

ファイルの最初のページには、一昨年の一週間の集合写真を貼りました。西野さんご夫妻が映っていないし、芳我先生ではなく坪井先生なのですが、テモテ教会のメインキャストが笑顔で映っているので、これを選びました。

オンライン礼拝などで、またつながれたら良いですね！

Holy Week



今年もパームサンデーには、西山一栄さんのお宅近くでシュロを採らせていただき、十字架を作り、礼拝堂も飾りました。ソテツは、鳴門聖パウロ教会の近くの線路際に生えていたものを採らせてもらいました。

聖木曜日（洗足式）はどなたもいらっしゃらなかったもので、夫が妻の足を洗う図になってしまいました。その後、十字架を外し、聖金曜日（受苦日）礼拝の時、十字架を掲げてから元に戻しました。聖土曜日（イースタービジュアル）とイースターには、三木あさ子さんが持ってきてくださったお花を飾りました。



みやた せんせえ より

「愛がわからない」

丁寧な言い方をすれば、孤独という表現が適切かもしれません。自閉症スペクトラムという特性が明らかになった今は、孤独であるということが私自身の特性に起因しているのだろうという理解をしています。人の心がわからないというのも、もう一つの表現でもあります。多くの人がそうであろうと考えている「共感」というものが欠落しています。じゃあ何をどうやって理解しているのかというと、これもまたわからないわけですけども、もの凄く冷静に他人事として捉えているように感じます。よくある表現に「人の痛みに寄り添う」という「人の痛み」というのも正直わかりません。他人の悲しみや苦しみ、痛みに関感するという感覚が欠落しているのでしょうか。ですから、多くの場合はなかなか共感するのは難しいです。妻の気持ちに寄り添うこともとても困難です。

物心がついたときにはすでに日々暴力を受けていました。親の温かみという記憶や感覚がありません。手を繋いだ記憶、おんぶや抱っこされた記憶、温かい家庭という記憶。記憶にあるのは、殴られ、罵声を浴びせられ、正座をさせられ、いつまで経ってもその場から自由になることが許されなかった小さな頃の記憶です。泣きながら「やめて」と叫んでも止むことなく、殴られながら「このまま呼吸が止まって死んでしまえばいいのに」といつも考えていました。幼稚園に行くよりも前の年齢だったかもしれません。

物心がついたときには、すでに孤独を感じていました。この世界で自分一人しか存在しない世界。だれも助けてくれることなく、理解されることもなく、ただ一人で呼吸をしている。そういう世界が私が見ているこの世界です。この感覚は今も大きく変わる事なく、見えない壁の中で一人で生きている感じです。

こうなると、他人のことがわからないだけでは収まらずに、他人から受ける事柄を上手に受け止めることが出来ません。「ありがとう」という言葉を言えるようになったのはいつからだったのだろうか。2007年頃にうつ病で暗闇の中を歩み、暗闇から出てきた頃から「ありがとう」という言葉を言えるようになったと思います。それまでは人を疑い、何か私にはわからない裏があるんじゃないか、なんで私のために尽力してくれるのだろうか、私は何も返すものは無いのに。とっていました。正直に言えば、いまもこの考え方が抜けていません。でも、素直に「ありがとう」と思えばいいんだ。素直に「うれしい」と表現していいんだ。と50才を迎えるおじさんが感じるようになりました。

妻からたくさん愛を受けているのだと思いますが、いまもって何が愛で、何を受け取っていたのかわかりません。妻からさえもわからないのですから、他の人からの愛というものもわかりません。神の愛はわかるのですか？と問われたら「はい、10年祈り続けたら妻と結婚出来ました。」と。神さまには2000年の結婚式の時に感謝をしました。その結婚式で妻は、「結婚の誓約の言葉が言えないかもしれない」と立会人の方に言ってからバージンロードを歩いたそうです。

2000年4月8日、私たちは「ミレニアム婚」しました。まわりの誰もが、本人さえも「大丈夫か？」とっていました。(笑)でも、婚姻届の証人欄にサインしてくださったご夫妻に、「彼は神さまにすべてを委ねることが出来る人だと思います」と確証なく言った言葉は、間違っていなかったと21年経って思います。神さまに委ね、イエスに倣って生きてきた結果、徳島にいるのだと思います。宮田が祈り続けていた10年、私は彼を拒んでいました。神の愛は、当日まで迷っていた私に、結婚の誓約の言葉を躊躇なく言わせました。「神の愛」は、あとから気づくものなのかもしれません。

マルセラ宮田美樹

2021/4/15発行